

第7回プラウト研究会 報告

『資本主義を超えて』第10章「私たちの文化は、私たちの強さである！」

次の4つが内容でした。

1. 心理的搾取、えせ文化、
2. 教育革命、ネオヒューマンイズムの学校、
3. 地域言語とグローバル言語
4. サマージ運動と分離独立-人民運動

そのうち、とくに3. について討論が行われました。

地域言語 - 国民言語（国語、公用語） - グローバル言語（現在は英語）

サーカーは、地域言語の重要性を強調する一方、国民言語やグローバル言語が共通語として必要であると言います。

しかし、地域言語が国民言語によって抑圧されてはいけないこと、それらは学校で教えられ職場やコミュニティの行政においても使用されるべきだとします。

討論では、母語と母国語という言い方は、個人から見た言語の分け方だろうということでした。母語は、生まれて以降、母（あるいはそれに代わる人）が子どもに語り、子どもが身につけた言葉であり、母国語はその人が自分の母国と思っている国の言葉であり、二つは必ずしも一致しない、ということ。たとえば、在日3世の場合は、2世の母が日本語で語れば、日本語が母語であるが、国籍や自分のアイデンティティがA国にあればその国の言語が母国語になるのではないか。

日本の方言も地域言語の一種であり、同じ地方でも川の流域によって微妙に異なることが参加者の体験から出された。日本の国語が明治政府によって東京の山の手言葉を「標準語」として形成された。そういう意味では、大阪弁や方言を大事にすべきである。

討論は、地域に根差した経済社会の形成はいかに可能か、という方向に転じ、さらに現在日本で進んでいる「デフレ・スパイラル」の評価に展開しました。これが進めば、人間生活が基本的に必要なものだけのあるべき姿に近づき、農業の自給を基礎に地域に根差した経済も作りやすくなるのではないかと。それに対しては、今日の経済を全体として自給的経済に戻すのは無理であろう、高度の産業発展を踏まえながら地域で循環する産業連関をどう作るかを構想しなければならないのではないかと、という反論も出た。